

10年後の学習塾の姿

学習塾の役割の変化

第一次ベビーブームの世代が大学受験を迎えた1965年当時、学習塾はほとんどありませんでした。今も残っている塾で言えば、中萬学院、成基学園、全教研などです。これらの塾は受験のために作られた塾ではなく全人教育のための塾です。

↓

当初、塾と言うのは、受験で難関校に合格させるために生まれたものです。塾が急速に広がりを見せるのが、第二次ベビーブームの世代が高校受験を迎えた1985年から1990年にかけての期間。この後予備校も最大化。

↓

しかし、そのブームを過ぎると、少子化が続き、塾の過当競争は激化し、進学塾が補習塾も兼ねるようになり、入塾テストは形骸化。5段階評価でボリュームゾーンの3レベルの生徒を入塾させるようになります。

↓

それでも生徒は減り続け、能力別クラス編成が難しくなり、ほとんどのクラス指導塾が2クラス編成になります。

↓

そのため、落ちこぼれが多くなり、個別指導塾の台頭を許す。個別指導塾は、入試対策は苦手で、定期テスト対策に力を入れます。クラス指導塾も半数以上は3レベルの生徒になったため、定期テスト対策に力を入れざるを得なくなりました。

↓

その中で、急速な技術革新と様々な困難が今の子供たちを待ち構えています。レベルの高い高校に行って、レベルの高い大学に行ければ人生幸せになれるような時代はありません。

過去に学べば、先輩に学べば仕事のできた時代は、とっくに終わり10年先、20年先が読めないと仕事は成功できません。

時代の変化についていくには学び続ける必要がありますが、これからはそれだけでは人生を成功に導くことはできません。未来予測をしながら人生の進路を選択しなければなりません。

子供たちは、自分を待ち受ける困難も希望も知らないままに育っています。未来に生きる力を育て、未来の自分の進路を考えさせ、その進路を実現するための力とは何かを見定めてから、その能力を育成することが、これからの教育の役割になります。

技術革新

今、学校ではプロジェクターを使った授業や映像教材、又は映像授業を使った授業が広がりを見せています。

大きな特徴は、価格破壊が起きていて、従来の授業料を取る感覚の映像授業ではなく、教材費感覚で使えるものが出てきたことです。

これによって、今まで、講師の介在が少なく、成功が難しかった映像授業の活用が、1対2の個別指導でもクラス指導でも、従来の指導法のまま、従来の授業料をもらいながら活用できるようになりました。

映像授業と学習管理ツールを組み合わせ、家庭学習指導を含めた指導が可能になりました。これが、これからの塾の基本スタイルになってゆくと思います。

指導スタイル

指導スタイルは千差万別になってきて、クラス指導、個別指導、自立型指導と言う概念も消えていくでしょう。

今までの、クラス指導や個別指導にはそれぞれに弱点があります。

簡単に述べると、クラス指導は落ちこぼれと浮きこぼれを作ってしまう、個別指導は依存心を助長し、授業料が高く5教科受講が難しいと言う弱点です。

これらの弱点を無くしていこうとすると、当初は出発点の違いや使う映像教材の違いから、千差万別の塾のスタイルが出てくるとは思います。最後に勝ち残るのは今の指導法の弱点すべてを解決するスタイルになると思います。